

### III. 国連軍縮長崎会議に参加して

「The United Nations Conference on Disarmament Issue :  
12-16, June, Nagasaki, Japan」

朝長 万左男

国連は原爆50周年の機会に国連アジア太平洋平和軍縮センターを中心として長崎市において核軍縮と核兵器廃絶をテーマとする会議を開催した。原爆被災学術資料センター長として会議に招待され、各国の軍縮大臣、国連大使、核軍縮専門家、政治学者、ジャーナリスト、科学者など約90名の討論をつぶさに聞く機会を得たのでここに報告する。

会議は第一日目には「過去半世紀における軍縮努力と将来展望」の討議から始まり、米ロ2国間軍縮交渉の経緯が両国のそれぞれの軍縮担当大使、次官から解説があり、ついで現在もっとも重要視されているNonproliferation Treaty (NPT) 条約の延長問題が、国連の同問題会議委員長のJayantha Danapala氏(スリランカ)から説明され、延長が投票なしに全会一致のかたちで承認されるに至った経緯が改めてよく理解できた。多数の核保有、非保有の国々の意見の交錯するなかでの交渉の困難さがDanapala氏のたぐいまれな外交手腕で達成されたことが、参加者の多くから何度も出てくる感謝の言葉で明らかになった。NPTの延長はもつれにもつれたあげくこの会議開催の直前になって延長が決まったこともあって、まだ会議にはその時の討議の雰囲気を持続しているという感じであった。

ついで米国の核問題専門学者、中国、フ

ランスの軍縮担当官、ドイツの軍縮大使、オーストラリアの政府代表、国連イラク問題特別委員会委員長らによる新たな戦略上の均衡と協力関係に基づく安全保障などをテーマとする、将来に向かっての取り組みが発表されホットな討議が続いた。

2日目は前日から続いて核軍縮の新たなアプローチについて、国際法専門家(日本)カナダ、インド、米国の軍縮担当官からの多国間の軍縮取り決めなどのきわめて細部にわたる検証と方向性が論じられた。信頼をいかに醸成するか?特に多国間のそれをいかに達成するか?この当たり前といえは当たりの論議が真剣になされるところが、利害が錯綜する国際関係の現実であることをしみじみと認識させられる。ここでもNPT条約が延長されたことが大きな枠組みとして作用して、次には包括的核実験禁止(CTBT)条約の締結への道筋が見えてくるとする意見が多くだされた(1996年8月現在CTBT交渉は最終段階に入っている)。以上の討論で議論はほぼ出尽くした感があった。

三日目は作業部会として設定され、しゅじゅの補完的な軍縮努力のあり方をめぐる討論、軍縮への環境づくりの具体論が発表された。アジアに関しては北アジアの非核地帯化が提案されたが、現在の北アジアの構成国の現状を見るといかにしてこれを達

成するかは、なかなか難問であるように見えた。また核物質の管理についても討議がなされ、我が国のプルトニウム政策が今後各国の議論の的になる可能性が示唆されていた。

今回の会議で、直接議題として討論されることはなかったものの、会議直前にもフランスによるムルロワの核実験が行われたこともあって、かなりフランスの大使に対する非難がなされたが、国益の一本槍ではねつける外交の第一線の舌線をかいま見て、核軍縮の領域で、国益に沿って成果を上げていく仕事に携わる各国の外交官、軍縮担当官の御苦勞を少し味わった気持ちになった。

地元を代表する形で土山秀夫前長崎大学学長から核軍縮、特にCTBT、そして核廃絶へのタイムスケジュールを明らかにして欲しいとする提案には、各国の代表も努力はするが、誰もそれを示すことはできないという感じであった。現在の世界がまさに誰にもスケジュールが読めない状況にあるとともに、しかし根強い国際世論の前に常に核軍縮の努力は国連の場において続けられることが示されていたように感じた。国連の公式の議論にいかにして国際世論を反映させて行くのかが、長崎、広島の被爆者をはじめとする、我々原爆問題に何らかの立場で関わるものの努めであろうと再認識した会議であった。西暦2000年までにタイムスケジュールは見えてくるであろうか？